



## 市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今年で54回目を迎えました。市内小・中・高等学校から寄せられた23編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。

### ★市長賞

安心して毎日を送れるありがたさ

安田小学校 6年

青木 彩さん

「ぼくはうそをついた」という本の題名を見て、どんなうそなのか気になり、この本を読み始めました。私はこれまでうそをついてお母さんに叱られてしまったり友達にうそをつかれて傷ついたことがありますが、うそには悪いイメージしかありません。でも表紙を見ると悪いことをしたような顔には見えず、どうだろうと興味をもちながら読み始めました。

読み終えて特に心に残った場面は二つです。一つ目は、りょうたがシゲルじいちゃんに戦争の話を聞いて、実際に原爆地がどんな様子だったのか感じに行くところです。私は学校の授業や本で原爆ドームや平和記念公園の写真を見たことがあるだけで、実物を見たことはありません。なぜ現地まで行ってみないかというところ、見る勇気がないからです。私は小さい頃に戦争の映像をテレビで見ても怖くて泣いてしまったことを今でも覚えています。りょうたも小さい頃、資料館へ行った時に展示品をちゃんと見ずに目をそむけていました。しかし、勇気を出して行ったりうそ

を見て私も修学旅行で広島に行った時に目をそむけずに戦争の恐ろしさをしっかりと感じて来ようと思いました。

二つ目は、りょうたがタツさんとうそをついた場面です。タツさんはりょうたの先輩のひいおばあさんです。タツさんは戦争で子供を亡くし今でも探しに行くことがあります。ある日、子供を探すために家を出たおばあさんを、先輩とりょうたが探しに行きます。見つけた時、タツさんはりょうたを亡くしたしょうただと思ってしまう、りょうたはしょうただとうそをつきます。この出来事をきっかけにタツさんは元気を取り戻します。ここで私はタイトルのうそとはこのことだったんだと思いました。私にとつてうそとは悪いイメージしかなかったけれど、この場面を読んで人を幸せにできる、元気にできるうそもあるんだということに初めて知りました。そしてタツさんのように戦争で傷つき、今でも忘れられずにいる人がいることを知りました。私は家族がいなくなると考えるだけで言葉にできないほどつらくなり悲しいです。それだけ、戦争が恐ろしいものだったということに改めて感じました。

私はこの本を読み終えて、うそには悪いものだけではなく場合によつ

てはいいうそもあるのだということを知りました。そして、戦争の恐ろしさを知り、自分が毎日を平和に送れることがとてもありがたいということに気づきました。夏休みにテレビで広島市の平和式典を見ました。戦争は昔のことなのに今でも式典をして平和の誓いを述べている様子を見て、同じ悲劇をくり返さないために今でも伝え続けているのだと思いました。これから私は、家族とずっと一緒にいられること、戦争がなく平和な日々が送れることは当たり前ではなく幸せなことだと感謝しながら日々をむだにしないで生活していきたいと思っています。

※読んだ本

「ぼくはうそをついた」

西村 すぐり (ポプラ社)

